

祭祀遺跡の文化遺産保護に関する研究

関 根 理 恵*

はじめに

2017年第41回世界遺産委員会は、「The Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region：神宿る島・宗像，沖ノ島と関連遺跡群」を世界遺産リストに登録することを議決した^①。

世界遺産リストへの登録は，UNESCOに付託されたConvention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage（1972年採択）（以下：世界遺産条約）に基づき行われている施策の一つである。

このリストに登録された遺産は，損傷や破壊等の脅威から保護され，積極的な保存が図られるとともに，国際的な協力や援助体制が確立される。

今回の研究対象となる祭祀遺跡は，世界遺産のなかでも，文化遺産もしくは，複合遺産に区分されるものである。文化遺産の定義は第1条で，下記の通り規定されている。

〈文化遺産及び自然遺産の定義〉

第1条

この条約の適用上，「文化遺産」とは，次のものをいう。

- ・記念工作物 記念的意義を有する彫刻及び絵画，考古学的物件又は構造物，銘文，洞窟住居並びにこれらの物件の集合体で，歴史上，美術上又は科学上顕著な普遍的価値を有するもの
- ・建造物群 独立した又は連続した建造物群で，

その建築性，均質性又は風景内における位置から，歴史上，美術上又は科学上顕著な普遍的価値を有するもの

- ・遺跡 人工の所産又は人工と自然の結合の所産及び考古学的遺跡を含む区域で，歴史上，観賞上，民族学上又は人類学上顕著な普遍的価値を有するもの

世界遺産に登録される祭祀関連遺産は，世界各地域に存在する。たとえば，モンゴルの「Great Burkhan Khaldun Mountain and its surrounding sacred Landscape：大ボルハン・ハルドゥン山とその周辺の聖なる景観」，イタリアの「Sacri Monti of Piedmont and Lombardy：ピエモンテとロンバルディアのサクリモンティ」，イスラエルの「Caves of Maresha and Bet-Guvrin in the Judean Lowlands as a Microcosm of the Land of the Caves：洞窟の地の小宇宙としてのユダヤ低地のマレシャとベイト・グブリンの洞窟群」，レバノンの「Quadi Qadisha (The Holy Vally) and the Forest of the Cedars of God (Horsh Arz el-Rab)：カシーシャ渓谷（聖なる谷）と神の杉の森（ホルシュ・アルツ・エルラーブ）」，ニジェリアの「Osun-osogbo Sacred Grove：オスン・オソボ聖林」，マリ中部にある「Cliff of Bandigara (Land of the Dogons)：バンディアガラ断崖（ドゴン人の地）」，ケニアのインド洋沿岸に広がる「Sacred Mijikenda Kaya Forest：ミジケンダの聖なるカヤの森林」，インドの「Rani-Ki-Vav (The Queen's Stepwell) at Patan, Gujarat：ラニ・キ・ヴァヴ・グジャラートパタンの女王の階段井戸」，アメリカ南東部にある「Chaco Culture：チャコ文化」，メキシコ

2017年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科専任講師 世界遺産，文化財保護，芸術

の「Historic Centre of Oaxaca and Archaeological Site of Monte Albán：オアハカ歴史地区とモンテ・アルバンの古代遺跡」など、アジアだけに分布しているものではない⁽²⁾。

祭祀遺跡とは、人類が、信仰や宗教、または思想、慣習や儀礼上の理由で、神や霊を祭ったと推定される遺跡を指すことが多い。

文字による記録が残されている時代の以前から存在している祭祀遺跡もあり、まだ発見されていない先史時代の遺跡も多数存在する。

典礼や礼拝など、宗教行事や慣習儀礼に利用されたと推定される利用方法やその性質が明確な系統だった遺跡の時代は、地域や文明によっても異なる。

古墳や記念物などは、生死観や霊等に関する思想的哲学が発達し、宗教的思想の発達段階に応じて、思想が示す宇宙観やそれぞれの宗教の經典に基づいて創造される。

これらの遺跡に共通するのは、山岳、洞穴、崖、河川、森林、湖、沼、池、泉、源流、海洋、島嶼などの自然に包まれた場所、あるいは、巨石や古木などの自然物自体に存在することが多い。

インドのヒマラヤ山脈に位置する「Nanda Devi and Valley of Flowers National Parks：ナンダ・デヴィ国立公園及び花の谷国立公園」のように、豊かな植生が残る手つかずの自然も Sacred Heritage として管理区分しているケースも UNESCO 内では見られる。しかし、そこには宗教的な思想的意味合いは持ち合わせておらず、これらは文化遺産ではなく純粋な自然遺産であり、先に提示した祭祀遺跡と同等の事例として考えることはできない。また、古墳や考古遺跡だけではなく、神社仏閣、教会など文化遺産に登録されている古い歴史的建造物も、言うなれば祭祀遺跡である。例えば、スペインの「San Millan Yuso and Suso Monasteries：サンミジャンユソとサン・ミジャン・スソ修道院群」などの10世紀頃のロマネスク様式の歴史的建造物も、UNESCOでは祭祀遺跡として認識しており、Sacred Heritageとして管理区分されている。

この種の教会等宗教施設を祭祀遺跡として数え

るとすると、逆に祭祀に無関係な文化遺産を探す方が難しいという状況に陥る⁽³⁾。

その意味では、UNESCO自身（正確には、World Heritage Conventionを統括管理・運用しているWorld Heritage Centre）も、Sacred Heritageの定義や管理区分をしっかりと確立できていないということが指摘できる。

そこで本論文では、現在UNESCOがSacred Heritageとして認識している94の世界遺産の中から事例となる遺跡を取り上げ、それらを分析し、事例研究を行う。

本研究の目的は、Sacred Heritageについて考察し、遺産の運用および保護の現状を明らかにするとともに、UNESCOの実施した施策の有用性について検証することである。

1. 世界遺産と Living Culture

世界遺産条約では、「Sacred Sites」について条文の中には直接の言及はない。しかし、世界遺産条約の今後の展開を示す世界遺産グローバルストラテジー⁽⁴⁾において、「生きた文化 Living Culture」が言及されており、無形遺産条約⁽⁵⁾（2003年採択）（以下：無形遺産条約）と連動して相互的な保護政策が採られている⁽⁶⁾。

そこでここでは、遡って「Living Culture」との関係から祭祀遺産についてアプローチを試みたい。

UNESCOは、今後の世界遺産運用などの方針などを決める会議を1994年に開催した。その会議は、アメリカ政府代表部の要請にしたがってイコモスとUNESCO世界遺産センターが先立って研究をしていた「世界遺産の定義」と「運用」に関して検討する国際会議であった。世界遺産グローバルストラテジー設立のための専門家会議⁽⁷⁾とも呼ばれ、テーマごとの研究が行われた。

その会議で、世界遺産の現状が分析され、問題点として以下の5点が指摘された⁽⁸⁾。

- ① ヨーロッパ地域の遺産が、他地域の遺産より登録件数が多い
- ② 歴史都市と宗教関連遺産が、他の種類の遺

産より多い

- ③ キリスト教の遺産が、他の宗教や信念を表す遺産より多い
- ④ 有史時代の遺産が、先史時代の遺産や20世紀の関連遺産より多い
- ⑤ 模範的建造物に対するエリート主義がみられ、地方的な遺産より多く登録されている

さらに、より総合的な点⁽⁹⁾として、「すべての生きた文化。特に『伝統的なもの』、その奥深さ、富裕さ、複雑さ、およびそれらを取り巻く環境との多様な関係は、世界遺産リストから探ることができない状況になっている」との指摘がなされた。

また同時に、「建築的価値の観点で評価をすると、伝統的な集落における住民の経済的、社会的、象徴的、哲学的次元、あるいは自然界との多くの継続的な相互作用が考慮できていない」⁽¹⁰⁾ことが指摘された。つまり、世界遺産の対象として、あらゆる形の人間の営みを網羅する必要があることが認識されたのである⁽¹¹⁾。

文化と自然、人間社会の創造物により織りなされる文化的景観⁽¹²⁾など、人間の生きた証を、世界遺産として積極的に保護することを戦略として組み込み、その方向性に舵を切った点において、この会議議決は、後の文化遺産保護政策に大きな影響を与えた。

1999年8月24-27日開催の第2回太平洋諸島地域の世界遺産グローバルストラテジー会議（バナアツ）⁽¹³⁾では、民族的な観点に立って、太平洋地域の地域的、環境的な、霊的な価値を評価することが試みられた⁽¹⁴⁾。ここで注目できるのが、「霊的な価値」に言及している点である。「文化に依拠して、すべてに人がアクセスすることが許可されていない『特定の歴史的場所／神聖な場所』がある」⁽¹⁵⁾という言葉も看過できない。その遺産内では、神聖な場所でのドレスコードや伝統的行動が必要とされている点にも触れ、注目している。

「Living Heritage」と「神聖な地」は関連付けられ、日常生活に根付いた『聖地』つまり『祭祀遺産』の概念の芽吹きをここに感じ取ることができる。

2. Living Heritage on Sacred Heritage

遺跡は、人類が存在した痕跡であり、人類の思想や文明の発展や衰退を知ることができる手がかりである。現代に生きる我々は、これら遺跡から得られる情報や知識は、現代の慣習や経験の中から取得されるものである。遺跡の用途や創建された目的は、時代を遡れば遡るほど、不確かになる。

一方、確かな情報が得られるときもある。それは、創建された当時のことを知ることができる確かな歴史資料が残っている場合である。もちろん、この根拠（エビデンス）となる歴史資料は、創建当初に創建者あるいは関係者などによって書かれているものが、もっとも有用であり、創建当時から時間が経過すればするほど、情報の精度は低くなる。

歴史資料以外の有用な根拠となるものもあり、それは、現在も利用され用途目的を果たし続けている遺跡である。遺産の保存状態の良し悪しに関係はない。

祭祀遺跡の場合は、祭祀にかかわる歳時や禁忌行為などは、大筋として宗教的意味合いや思想、慣習の観点において、創建当初と異なることは少ないことから、当時の姿を知る手がかりにもなる。

UNESCOでは、Living Heritageの保護政策を現在実行しており、Living Heritageの運用及び保護への関心が高まっている。

UNESCOのLiving Heritageの保護政策は、「Safe Guarding Communities' Living Heritage」⁽¹⁶⁾という施策名で知られている。これは主に無形遺産の保護を念頭に置いた施策である。

この施策の特徴は、人間と遺産の関係を重視していることである。文化遺産は、人間によって創造された遺産であることから、創造者である人間に注目して、遺産に人間がどのようにかかわっているのか。そして、遺産は、どのような役割を果たしているのかという点を特に重要視している。

人間といっても、大統領や芸術家などの歴史上の著名な人物など一個人と遺産の関係ではなく、Living Heritageは、生活の中から生み出される

という考えから、Living（生きている）の根源は、人間と人間とのつながり、つまりコミュニティから派生すると考えられている⁽¹⁷⁾。

ICCROM は、遺産の重要性として、歴史的古さや芸術的価値など物理的な重要性だけではなく、社会全体でどのように評価され、使用されているのかについて注目し、遺産保護政策の中で、施策・措置の決定の中心に人間の日常生活や習性を基盤において考えることの重要性を提案している⁽¹⁸⁾。

ICCROM は、この施策・措置決定のメソッドを、「People-Centered Approach (PCA)」と呼び長期計画として推進している。

さらに、地域の人々の参加⁽¹⁹⁾と遺産とのつながりが、遺産の保全と管理に不可欠な要素であることを指摘している⁽²⁰⁾。

Living Heritage の事例

ここで、Living Heritage の事例として、ニジェリアの「Osun-osogbo Sacred Grove : オスン・オソボ聖林」⁽²¹⁾について考察する。以下現状分析は、ニジェリア政府より UNESCO に提出された世界遺産登録申請書⁽²²⁾を分析するものとする。

オスン・オソボ聖林は、高地原生林であり、ニジェリアに残された最後の密林と言われている。また、オスン・オソボ聖林は、ニジェリアの宇宙観を示す文化遺産でもある。

オスンとは、サンゴの妻であり、サンゴの他の妻と取り違えられたオスンは、雷と光に打たれ、川の中に魂が宿ったと考えられている。オスン川の源泉は、イジェドエキティ (Igede-Ekiti) であり、オソングの街で川は分岐し、そのままアトランティックオーシャンに流れ込んでいる。

ニジェリアの人々は、オスンの聖なる水を「生命の水」と考え、その水から癒しを受けることができるかと強く信じている。吉凶や繁栄も、川、そして川の蛇行した場所にできた森林の中に、女神とともに宿っているとも考えられている。そのため、この森は非常に神聖な聖域であり、また、エリアごとに聖なる社が築かれている。その他、彫刻と芸術作品によって、オスンとその他ヨルバの神々を称えるための祭祀物が祀られている。森の

中には、神聖な洞窟もある。伝統的な神木や、聖なる石、金属製品、泥でできたもの、木製の彫刻、それら様々な森の中の神々が洞窟に鎮座している。

オスン川やオソゴボは、神聖な森であり、それ自体が、オスンの人々の出自や、家系由来の祖先と考えられている。そのため、狩猟や釣りが、慣習法の中で禁じられており、宗教制裁によっても同様に禁じられている。

洞窟の中には、オソゴボ王朝の起源を示すものが置かれており、洞窟の中から始まった王国の基盤を示す遺産となっている。

聖なる森と都市の発展は、同時に起こっており、最初のオスンとオショーボの2つ王朝の古代宮殿は、森の中に構築された。同様に、最初の市場も、森の中に設置された。

第三の宮殿は、オソゴボの街中に建てられ、一番古い最初の市場が森の中にあるので、その都市計画を真似て王の市場も、第三の宮殿のそばに作られた。現在の宮殿の敷地内には、聖なるオスンの家が作られ、祀られている。

注目すべきは、オスンの森が、そのままオソゴボ町に復元されている点である。森の存在自体が、有形・無形の遺産であり、この地域の根源的な価値を有している。

また、森自体が、祭祀の場所となっており、巡礼が定期的に行われている。心霊的な心の拠り所ともなっているため、個人的な礼拝も常時おこなわれている。

1950年代の植民地主義により多様な宗教が信仰されるようになり、イスラム教、キリスト教、伝統主義者など、この地域は、複雑な宗教的背景を持つようになった。しかし、このオスンの森は、それぞれの宗教が融和する聖なる場所として、地位を保っており、独特で貴重な場所ともなっている。

事例分析

この事例で、注目すべき点は、古来から伝統的継承によって現代にも伝わる地的な民俗信仰が、宗教とは異なる立場で独立を保っていることであろう。これは、土着信仰ともいわれるものである

が、アニミズムでもある。霊的存在が自然に宿ると考えられているものであるが、生物などの有機物だけではなく、巨石などの無機物にもそれが宿ると考えられている点も興味深い。これらは、精霊信仰、地霊信仰と呼ばれるものであるが、この事例では、実在したと考えられる人間が精霊に変化し、その精霊が、信仰の対象になっている点がオスン・オソボ聖林の個有の特徴を表している。

森の中を、聖なる場所とし、森の外に森と同じ形式の都市を創建する点も興味深い。文化的景観としては、残存する景観でもあり、継承される景観にも区分することができるだろう。有機的に進化する景観として、新しい都市が森の外に創建されている点も、タウンプランニングの事例として貴重な事例である。

保護事例としては、慣習法が確立されるとともに、宗教的制裁などの罰則が規定されているのも、この地域の人々の公共性や社会性、モラル、思想などを指し示すものであり、古代を知る上で重要な手がかりとなっている。

保護の現状

保護の現状については、ニジェリア政府より世界遺産委員会へ提出された State of Conservation Reports (2014, 2015, 2016)⁽²³⁾と ICOMOS による Reactive Monitoring Mission の Report⁽²⁴⁾を分析する。

オスン・オソボ聖林における現状の問題では、森林の破壊、農用地などへの土地の改変、森林の伐採、聖なる神木の木々の損傷や、聖なる石のひび割れなどが報告されている。

同時にこれらに対応することが、急務であることも指摘されている。

一方で、オーストリアから移住してきたスザンヌ・ベンガー氏が、市や王族の支援を受け、この森の救済に取り組んでいることが特記事項として報告されている。ベンガー氏は、オバタラ教団という集団を立ち上げ、創造と創造を担う神性を掲げ、救済事業を行っている。この活動により、地元の宗教芸術家として活躍していた人々や、職人、建築家にコミュニティが生まれている。彼らは、

コミュニティ全体で連携し、孤立した神社や倒れた木々の代わりに新しい信仰の対象となる彫刻像を建立するなど、積極的復元作業に取り組んでいる。これらのコミュニティが、密猟者や土地の投機家を遠ざける要因ともなっており、地域のコミュニティ力と信仰が、祭祀遺産の保護に大いに貢献している事例であるといえる。

結論

本論文では、世界遺産と祭祀遺跡の関係について考察した。生きた遺産の中では、コミュニティの力と信仰が、文化遺産保護に役立っている事例を明示することができた。

従来の文化遺産保護では、文化遺産の真正性にばかり注目されてきた。しかし、文化多様性の観点から、偏重的な価値基準による判断に基づいて保護されるべき遺産が決定されるのではなく、もっと土着的な地域に根差した文化や、そこに住む人間との関わりに着目した遺産の保護に、重点を置くことで遺産の保全や保存修復が円滑におこなえることをオスン・オソボ聖林の事例により確認することができた。

UNESCO のグローバルストラテジーは、マンネリの脱却を狙ったものと言われることもあるが、無形遺産を数多く持つ国においては、有用な政策であることを、本論文で確認することができた。

常設的ではない空間や祭祀遺跡を保存することは、人々の公共性や社会性、モラル、信仰、思想などを保存することにつながり、直接的に無形遺産保護や文化遺産保護に有用な措置であることがわかった。

《注》

- (1) WHC.17/41.COM/18 Decisions adopted during the 41st session of the World Heritage Committee (Krakow, 2017)
- (2) World Heritage Properties の中で世界遺産センターが、Sacred Heritage に管理区分している遺産は、2017年10月現在、94件存在する。
- (3) 上記注の通り、Sacred Heritage として認識されているのは、94遺跡であるが、宗教的建造物と

- 祭祀遺跡の違いは必ずしも明確ではなく、Sacred Heritage を特定できる定義は必ずしも定まっていない。そのため、登録申請にあたって加盟国が、遺産名に自由に Sacred という表現を用いた遺産が Sacred Heritage に登録されている状態にある。
- (4) Expert Meeting on the “Global Strategy” and thematic studies for a representative World Heritage List, UNESCO Headquarters, 20–22 June 1994
- (5) 32 C/26, 18 July 2003, Original: French, PRELIMINARY DRAFT INTERNATIONAL CONVENTION FOR THE SAFEGUARDING OF THE INTANGIBLE CULTURAL HERITAGE AND REPORT BY THE DIRECTOR-GENERAL ON THE SITUATION CALLING FOR STANDARD-SETTING AND ON THE POSSIBLE SCOPE OF SUCH STANDARD-SETTING
- (6) WHC-09/34.COM/5E, Paris, 9 July 2010
- (7) WHC-94/CONF.003/INF.6, Paris, 13 October 1994: Expert Meeting on the “Global Strategy” and Thematic Studies for a Representative World Heritage List, CONVENTION CONCERNING THE PROTECTION OF THE WORLD CULTURAL AND NATURAL HERITAGE, 20–22 June 1994: WORLD HERITAGE COMMITTEE, Eighteenth Session Phuket, Thailand, 12–17 November 1994 UNESCO Headquarters
- (8) WHC-94/CONF.003/INF.6, Paris, 13 October 1994: Expert Meeting on the “Global Strategy” and Thematic Studies for a Representative World Heritage List, CONVENTION CONCERNING THE PROTECTION OF THE WORLD CULTURAL AND NATURAL HERITAGE, 20–22 June 1994: WORLD HERITAGE COMMITTEE, Eighteenth Session Phuket, Thailand, 12–17 November 1994 UNESCO Headquarters
- ① Europe was over-represented in relation to the rest of the world;
 - ② Historic Towns and Religious Buildings were over-represented in Relation to other types of Property;
 - ③ Christianity was over-represented in Relation to other Religions and Beliefs;
 - ④ Historical periods were over-represented in Relation to Prehistory and the 20th Century;
 - ⑤ “Elitist” Architecture was over-represented in relation to Vernacular Architecture;
- (9) WHC-94/CONF.003/INF.6, Paris, 13 October 1994: Expert Meeting on the “Global Strategy” and Thematic Studies for a Representative World Heritage List, CONVENTION CONCERNING THE PROTECTION OF THE WORLD CULTURAL AND NATURAL HERITAGE, 20–22 June 1994: WORLD HERITAGE COMMITTEE, Eighteenth Session Phuket, Thailand, 12–17 November 1994 UNESCO Headquarters: “in more general terms, all living cultures — and especially the “Traditional” ones —, with their depth, their wealth, their complexity, and their diverse relationships with their environment, figured very little on the List.”
- (10) WHC-94/CONF.003/INF.6, Paris, 13 October 1994: Expert Meeting on the “Global Strategy” and thematic studies for a representative World Heritage List, CONVENTION CONCERNING THE PROTECTION OF THE WORLD CULTURAL AND NATURAL HERITAGE, 20–22 June 1994: WORLD HERITAGE COMMITTEE, Eighteenth session Phuket, Thailand, 12–17 November 1994 UNESCO Headquarters: ““Even traditional settlements were only included on the List in terms of their “architectural” value, taking no account of their many economic, social, symbolic, and philosophical dimensions or of their many continuing interactions with their natural environment in all its diversity.””
- (11) WHC-94/CONF.003/INF.6, Paris, 13 October 1994: Expert Meeting on the “Global Strategy” and thematic studies for a representative World Heritage List, CONVENTION CONCERNING THE PROTECTION OF THE WORLD CULTURAL AND NATURAL HERITAGE, 20–22 June 1994: WORLD HERITAGE COMMITTEE, Eighteenth session Phuket, Thailand, 12–17 November 1994 UNESCO Headquarters: “This impoverishment of the cultural expression of human societies was also due to an over-simplified division between cultural and natural properties which took no account of the fact that in most human societies the landscape, which was created or at all events inhabited by human beings, was representative and an expression of the lives of the people who live in it and so was in this sense equally culturally meaningful.”
- (12) ““the fact that in most human societies the landscape”” という表現は、単なる景色ではなく、

- 人間社会と結びついた景観を指し示しており、Cultural Landscape の概念と呼応している。
- (13) Identification of World Heritage Properties in the Pacific, Second world Heritage Global Strategy Meeting for the Pacific Island Region, in association with the Pacific Island Museums Association (PIMA) and the Vanuatu Cultural Centre, 24-27 August 1999
- (14) Identification of World Heritage Properties in the Pacific, Second World Heritage Global Strategy Meeting for the Pacific Island Region, in Association with the Pacific Island Museums Association (PIMA) and the Vanuatu Cultural Centre, 24-27 August 1999 ““The meeting recommended the preparation of ethical guidelines for the protection of the material, environmental and spiritual values of sites in the pacific.””
- (15) ““Depending upon the culture and type of site, certain types of visitors may not necessarily be permitted to actually visit all areas of certain historical/sacred sites. certain dress and behavior codes may need to be followed as well as restriction in numbers to protect the environment of the site””
- (16) Promoting People-Centered Approaches to Conservation: Living Heritage
- (17) Gemini Wijesuriya, Summary, The Living Heritage Approach,
- (18) Gamini Wijesuriya, Building on ICCROM's Living Heritage Sites Programme, Summary, The Living Heritage Approach
- (19) Gamini Wijesuriya, Engaging Communities, Summary, The Living Heritage Approach
- (20) Gamini Wijesuriya, Goals, Summary, The Living Heritage Approach
- (21) World Heritage Nomination File:Osun-Osogbo sacred Grove, 15th july 2005
- (22) Nomination file 1118 (21 MB), 2005
- (23) STATE OF CONSERVATION REPORT ON OSUN-OSOGBO WORLD SACRED GROVE, WORLD HERITAGE SITE (2014), Progress report on State of Conservation of OSUN-OSOGBO Sacred Grove, OSOGBO, NIGERIA (2015), State of Conservation report on OSUN OSOGBO Sacred Grove, OSOGBO, NIGERIA (2016)
- (24) Report on the ICOMOS Reactive Monitoring Mission to Osun-Osogbo Sacred Grove, 25-30 October 2015.